特254
830

勝田の聖蹟

始

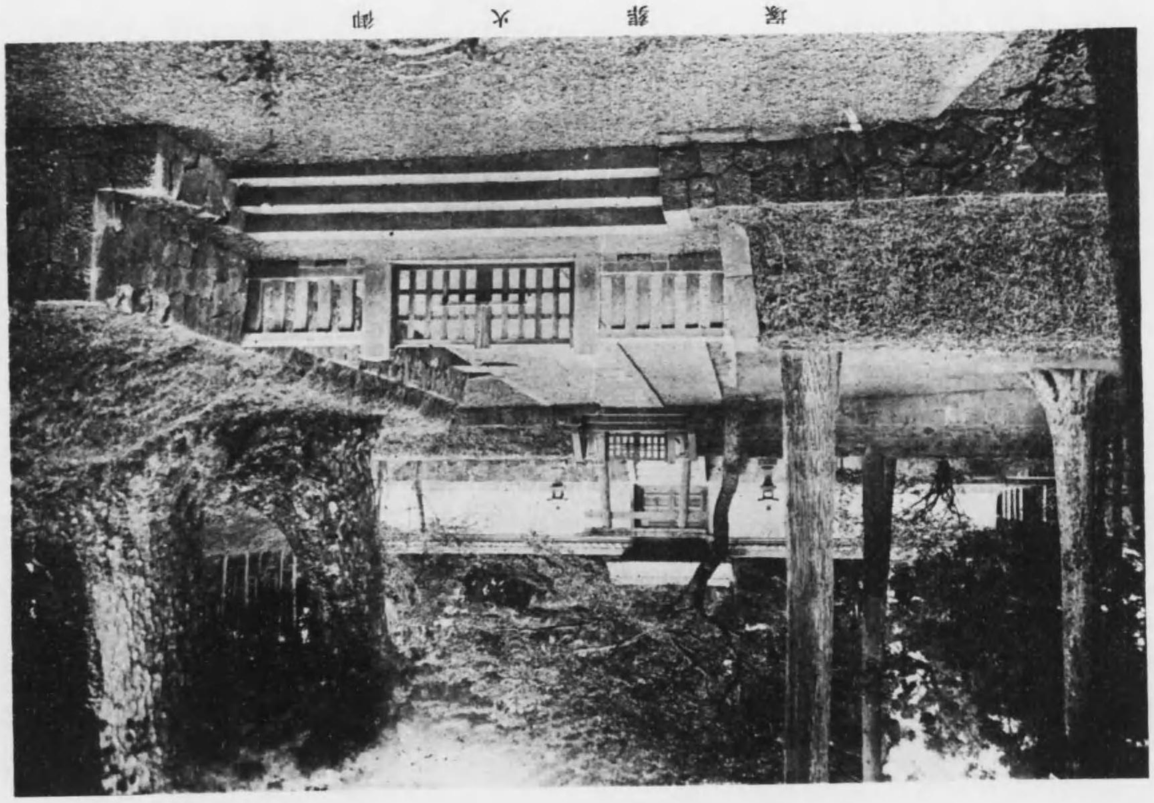
特254
830

本編は本村小學校兒童のために本會事業として聖蹟に關する鄉土の傳說を採つて編纂したものである。

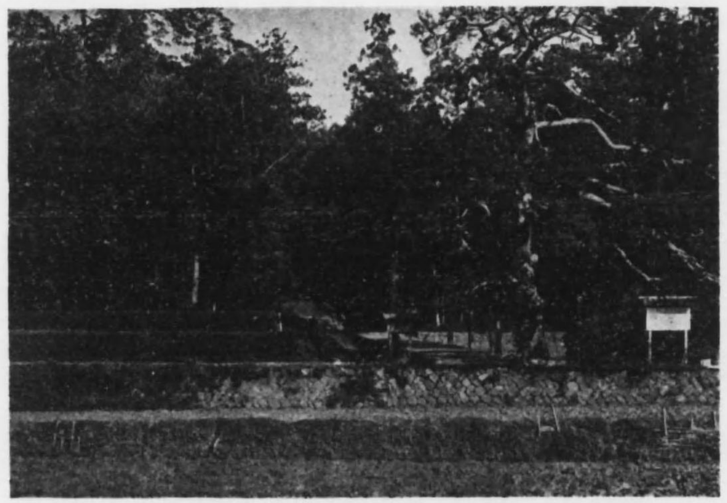
本編纂にあたつて島師木島敎諭の御指導を受くること多大であつた玆にその御厚意を深く感謝するものである。

昭和十二年十一月

海士村敎員會



塚　群　火　御



參道正面

行在所址

目次

第一、後鳥羽天皇……一
承久の變……二
御遷幸……三
御在島十九年……九
第二、山陵と行在所阯……一五
勝田の山陵……一五
源福寺……一八
第三、村上家……二〇
家柄……二〇
勤王事蹟……二三
寶物……二五

第四、御番鍛冶……二七
御番鍛冶……二七
梶谷家……二八
第五、島民の赤誠……二九
第六、兩度の行啓……三一
大正天皇……三一
今上天皇……三三
奉迎歌……三五
附錄　年代表
遠島百首

八〇 高倉 ─ 八一 安德
八二 後鳥羽 ─ 八三 土御門
八四 順德

文治元年四月御即位

御年十九
院政二十三ヶ年

第一　後鳥羽天皇

後鳥羽天皇は、御名を尊成と申し上げ、高倉天皇の第四の皇子で治承四年（紀元一八四〇）七月十五日の御誕生で御年六で御即位になつた。

御生まれつき嚴格な御方で、いつも日課をきめて、いろいろの御事をつぎ〳〵に行はせられ、たとひ風が吹かうと雨が降らうと、決してこれをおとりやめなさるやうなことはなかつた。

天皇は、いろ〳〵の道に秀でられたが、殊に和歌の御名人でいらつしやつた。

御在位十四年で、御位を土御門天皇に御讓りなさつた後も、なほ院においでになつて政治をおとりになつた。

かつて北條氏の無道を御怒りになつて

奥山のおどろの下もふみわけて
　みちある世ぞと人にしらせむ

とおよみになつた。

承久の變

承久三年は紀元一八八一年御年四十二

たま〳〵頼朝の子孫が絶えても、幕府の政治はもとのまゝである上に、北條義時はたび〳〵上皇のおほせにそむいたので、承久三年にいよいよ國々の武士を呼寄せて、義時をお討たせになることゝなつた。

義時は、これを聞くと大さう驚き、子の泰時らにいひつけて、大軍をひきゐて京都に上らせた。泰時らは、官軍を尾張、美濃、近江などの各地で破り勢にまかせて京都に攻入つた。

さうして、義時は、たゞちに、上皇にお味方申した人々を斬つたり流したりしたので、京都はたゝへやうもない程大騒ぎになつた。

御遷幸

（北條氏）義時―泰時―時氏

道助法親王は後鳥羽上皇の御子

後鳥羽上皇は、北條氏がどのやうな事をするのかと深く御案じになつていらつしやると、七月六日に、六波羅から、北條時氏が參つて、鳥羽殿に御遷りになるやうに申し上げたので御名残りを惜しまれながら仙洞御所から御遷りになつた。その上一日おいて七月八日には、六波羅から御出家なさるやうにと申し上げたので、すでに御決心の上であつたのか、さほど御驚きの御様子もなく御室の道助法親王を御召しになつて御剃髪なさつて良然と申し上げることゝなつた。そして藤原信實にこの御姿を寫しとらせ上皇の御母七條院に御送りになつた。

七條院は、その御うつしを一目御覧になると、上皇のあまりにも御變りになつたのに驚き悲しまれ、一度おあひしようと修

明門院（順德天皇の御母）と御一緒に鳥羽殿においでになつた。上皇は、そのお姿で御二人に御あひになるのを悲しまれ簾から御顏だけ出され右手を打振られながらこのまゝ御歸りになられる樣、申されたので御二人は胸もふさがる御心地で聲を立てゝ泣き入らせられたといふ。

七月十三日またも時氏は六波羅から、參つて上皇に隱岐へ御遷りになるやう申上げたので上皇は大さう御驚きになつて「すでに出家までしたからにはこの上遠國にまで行かなくともよいではないか」と仰せられたが時氏は「私の考から出たことでありましたら如何樣にもお取計ひ致しませうが鎌倉の命でありますから、致方もございませぬ」とて粗末な網代車を持つて來て、一時も早くこれに御のりになるようにと、急き立て申したので、上皇も致方なくこれが、この世の別れともなるかと急ぎ七條院と修明門院に御知らせになつたところ御二人も驚き參られて七條院は「どのやうな宿世の因緣でかやうになられるのか」と御袖にとりつかれ、修明門院も御胸をかき抱いて打伏し「私の身は惜しくもありませぬのに」と涙にくれて共々に御歎きになつたが、上皇は「何事も夢の世だから御歎きなさるな」と御淋しげに御笑ひになつたが、御眼は御涙で曇つていらつしやつた。上皇は都への御名殘りを惜しまれて關白近衞家實に

墨染の袖になさけをかけよかし
涙ばかりはすてもこそすれ

（一說には九條公ともいふ）
（すてもこそすれ（くちもこそすれ）ともあり）

この御製を下された。

かうした間にも時氏は網代車をお側へかきよせて「御名殘の盡きせぬは御もつともながら、今は致方もない故、御あきらめ

上皇と同じ月に皇子順德上皇（佐渡）賴仁親王（備前）雅成親王（但馬）同年十月土御門上皇（土佐）御還幸美保關は當時大濱の海といふ

濱千鳥（浦千鳥）袖のけしきを（袖の涙を）などあり

になつてはやく」させき立て申したので、遂にやむなく僅か數人の供人をしたがへさせられ多くの警固の武士に護られて都をおたちになつた。

さうして七月二十七日に、漸く美保關にお着きになつて、三明院（今の佛谷寺）をしばしの行在所とせられ御船待になつた。

ここからいよ〳〵隱岐へ御渡りになるので、警固の武士を都に歸されたが、その折修明門院に

しるらめやうきめを美保の濱千鳥

なく〳〵しぼる袖のけしきを

の御製を托されて、御名殘を惜しまれた。

八月五日御船出されて隱岐に向はれたが、次第に隱岐に近づくにつれて波風が荒くなり、もはや御船を進める事が出來なくなつた、この時上皇は

この御製は行在所にての御詠ともいふ

われこそは新島守よおきの海の
あらきなみ風こころして吹け

の御製をお詠みになつたところ心ない波風も、御心に感じてか、次第に治まり御船を進めることが出來たといふ。

この御腰掛石は宿乞の石ともいふ

御腰掛ノ石（崎）

まもなく、はるかに一点の燈火が見えたので、それを賴りに崎の港に御着きになつた。

ここで御上陸になつて、しばしの間路傍のうつ木の下にあつた石に御憩ひになり、あたりの民家に御宿を乞はしめられた。

民家は嘉十の家と傳ふ

しかし里人は一天萬乘の君を、むさくるしい、民家へお泊め致すことは、あまりにもおそれ多いので御ことわり申し上げ、遂

にその夜は氏神(三保神社)の參籠舍で、隱岐での第一夜を、おあかしになつたが、これは大さう粗末な茅葺の家であつたので

命あれば茅が軒端の月もみつ
知れぬは人の行末の空

と、およみになつたといふ。

翌朝ここを御立ちになつて堤浦から海士へ御渡りにならうと御船出なさつたが、御引きかへしになり天ケ谷から山路をたどられ峰づたひに海士の里へ御越しになり、苅田の源福寺の行在所にお入りになつた。

御駐泊記念碑（崎）

御駐泊碑昭和十一年一月一日建碑參籠舍址にあり

御在島十九年

御自作の刀劍には助秀の銘と菊（十七葉）の御文章を入れられたといふ

その御道すがら國原(今の安國寺附近)のあたりで、牧場に群れ遊ぶ牛の戯れに、突きあふを御覽になつて殊の外、興がられたとの御事である。

國原

源福寺の行在所は、ごく粗末な茅葺の家で日常の御くらしも御不自由で、いらつしやつた。そこで御所の近くにある土地の豪族村上助九郎の邸にたびゝ行幸をなさつた。そして、同家から毎日の供御をさし上げたとの事である。上皇平素の御生活は刀劍を御鍛へになつた

御腰掛石（國原）

承久の變に京都に集つた一万七千の武士の多くは御作の太刀か或は三十六人の御番鍛冶の力作を持つて討幕に從つたといふ

り、和歌をおよみになつて御さびしい日を送つていらつしやつた。

刀劍については、久國、延房からその術を教はつていらつしやつた、ほどで殊の外お嗜みになり、はる〴〵京都や備前から月番に刀鍛冶をお呼寄せになつて、それらを御相手に刀劍をおつくりになつた。

同じ世にまたすみのえの月や見ん今日こそよそにおきの島守

うらやまし長き日影の春にあひて汐くむあまも櫛やほすらむ

又行在所で、およみになつた澤山な御製の中から今に傳はるものに、遠島百首がある。

上皇はそのまゝ、隱岐の土となられる御考へはなく都へ御歸りになることを、信ぜられ、今は隱岐の島守ながら又この世で昔のやうに住ノ江離宮の月をみる日を待つてゐられた。しかし、幾年たつても、その時は來さうもない春のながい日、漁夫の濡れた着物を干すのを御覽になつて御自分の袖の乾くまの

今日とてや大宮人はかへぬらむ昔ながらの夏衣かな

晉無の松は明治初年枯る現在は明治四十年六月皇太子殿下御手植の松を晉無の松と稱す

故郷を別路におふるくずの葉の秋はくれどもかへる世もなし

ないのをなげかれ夏の衣替の日には大宮人をお思ひになつて毎年同じ御衣をめしてゐられる御境遇をかなしまれた。ある夏の夕、お庭の池になく蛙の聲や、老松に吹く風の音に都をおしのびになつて

蛙なく勝田の池の夕たゝみ
きかましものは松風の音

とおよみになつたので蛙もなく音、をやめ松もその音を絶つたといふ。かうした、いはれからこの老松を晉無の松と呼ぶにいたつた。

又秋になつて葛の葉の風に裏がへるを、御覽になつて「歸る」を御聯想になり、初冬の御庭の紅葉の色づくを御覽じては、かやうに色の濃いのは秋のしぐれのためばかりでなく自分の涙のそそぐからであらうとお淋しく御思ひになつた。

かうして日を御すごしになつて、いちつしやつたある日のこと御母七條院から冬の夜寒を思はれて、夜のしとねや墨染の衣などを上皇のもとに御とゞけになつた、その手紙に

淋しいつまらない月日を送ることである。この世で今一度あなたにお會ひしたい。さうでないと死ぬにも死ねない。

との御意味の事が書かれてあつた。

上皇はその手紙を御顏におしあてて、御なげきになつたが、ややあつて

八百萬神もあはれめたらちねの
われ待るえむとたえぬ玉の緒

とおよみになつて、お母君の御身の上を天地の神々に、おいのりになつた。

土御門上皇は土佐から阿波へ御遷幸

かやうに御母子お互に御會ひなさる日を待たれたが、たうとうその日は來ないでお別れになつてから、八年目に七條院はおなくなりになつた。それから更に三年、土御門上皇も阿波でおかくれになつた。これ等のお悲しみの爲上皇の御淋しい、御生活は一そう深められた。それからはおそばに奉仕の方々を御相手に觀音の像を御刻みになつたり法華經を寫されたり六字の名號を書かれたりして淨行をおつとめになつた。その中に上皇御還幸の說が傳へられたので、一時それを御たのしみになつて、いらつしやつたが、それもたうとう實現しないで延應元年の春となつた。御体もしだいに衰へ、もはやこの島の土となられることを御覺悟になつて二月九日には七條院の御生家である水無瀨信成、親成の父子に御書置を下さつた。その御置文には

延應元年
紀元一八九九

自分の病氣をどうかして治さうと思ふが、日一日と重つて行くのだから、大方最期ときまつた樣に思はれる。日頃のお前達の奉公は可愛想に思ふ、けれども自分には便宜の所領もなく力及ばないが水無瀨、井ノ口二ケ所は間違なく知行するから自分のなき後の弔ひをくれぐれもたのむ。押手を殘して置くから之にそむきはすまい。

御置文

この御文意である。そして御兩手に朱をおつけになり御置文の中央左右にはつきりと押された。

それから十四日の後即ち延應元年二月二十二日(太陽曆四月四日)たうとう、御のぞみもとげられずに御年六十でおかくれになつた。

承久三年御年四十二で御うつりになつてから十九年のわびしい御すまゐであつた。まことにまことに申しあげやうもないおそれ多い御事である。

大原は京都市の北東に在る

二十五日後の山で御火葬申し上げ御遺骨は藤原能茂が奉持して大原の勝林院に藏められたが後二年水無瀨の離宮を大原にうつし法華堂を建てここにお納めした。

又御遺灰は勝田の山陵に御埋葬申した。

勝田の山陵

第二　山陵と行在所阯

この山陵には上皇のおかくれに、なつてから、凡そ四百年の間はたゞめじるしの碑を置いたばかりであつた。

今から凡三百三十年前

慶長の頃飛鳥井雅賢がこの地に流された時これではあまりにおそれ多いとて御陵修理を思ひ立つた。

外苑忠魂碑の後に飛鳥井雅賢の碑がある

萬治元年　紀元二三一八

その後五十年、萬治元年、松江藩主松平直政は山陵を修理し初めてここに社を建て上皇の御神靈を、おまつりした。更に十七年の後松平綱隆は父の志をついで、御陵の御修理をなしそれから、六十年松平宗衍社殿の、あれはてたのを、みてこれを再建したが、その後は少しも御修理の事がなかつたので社殿は大そうあれはてゝ雨露がもる程になつた。そこで、村上家では源福寺の住職とはかつて藩主松平氏にたび〳〵おつくりかへを願つたが取合はなかつたので致し方なく御神体をしばらく源福寺におうつし、して社殿の再建をはかり廣く島内に寄附を募つた。この時村上助九郎秀隆は費用の足らないのを憂へほとんど自分の費用をもつておつくり、かへした。そればか

延寶三年（二三三五）

享保二十年（二三九五）

文政二年（二四七九）のこと

りでなく輿庫を建てたり、神輿を献じたり鳥居燈籠を設けたりして大いに面目を改め、盛んな正遷宮を行つたといふ。

その後もこのお社の一切の行事は、村上家でとり行つた。

江戸幕府の末頃、尊王攘夷の論が盛んとなつて外艦砲撃の事さへ、あつたので松江藩は山陵守衛のためとて兵凡そ五十人を置いたが明治の初隠岐動亂のとき引き上げて後は又來島しなかつた。

明治六年明治天皇は深い思召しから山陵奉還の儀を、とり行はせられた。この時奉迎使は御親作の御尊像と御劍等を唐櫃に納め村上家の秋吉丸で京へ御かへりになつて御神靈を水瀬宮におまつりになつた。

翌年四月鳥取縣廳の命によつて社殿を取拂つて、燒いた上御本殿趾（御火葬塚）へ埋めることゝなつた。このとき、そこに敷い

秋吉丸は諏訪灣から出帆途中崎港に寄港

當時隠岐は鳥取縣所管

てあつた小石をかきわけたのに、三つの甕が現はれたが何れも上皇御火葬の時のもので、皆おそれおほくて、深くは堀ることもしないで清い砂を運んで來て恭しくお納めした。

これから後島民は一さう敬慕の念を深めた。

このところは後に御火葬所と稱せられ更に御火葬塚と改稱せられ、明治二十五年から守部を置かれ、村上助九郎代々之に任ぜられてゐる。

明治四十五年宮内省は御陵に大修理を加へられ築地をめぐらした。

明治十八年小修理

源福寺

天平時代凡そ千二百年前

源福寺は天平の頃、聖武天皇の勅願によつて建てられた眞言宗の寺院で初め苅田山苅田寺轉法輪院と、いつたが後鳥羽上皇のこの寺におうつりの時、勝田山源福寺隱岐院と御なづけになつた。

寛永九年上皇四百回御忌（御取越）御追悼のため水無瀬中納言成氏卿來島の際若般心經及び御寄合御詠短冊二十首奉納せられたその卷頭首は後水尾天皇の御製である

廢佛の時本堂の本尊は殘つた

現在同寺は海士村中里御神尻に在る

本堂の額（持明院基延の筆）

行在所はこの寺の本堂をあてられ種々の御用向はこの寺でお勤めし供御は村上家からさし上げたといふ。

上皇はこの行在所で天下泰平國家安穩をいのらせられて毎年三月二十一日に護摩修行をおつとめになつたが、この事はおかくれになつた後も行はれて今につづいてゐる。

明治二年廢佛騷動のときこの寺も取りこぼたれたが明治十七年再建され大正十年今の地にうつした。

奉藏の鐵瓶（源福寺）

行在所址は間口十六間奥行八間あり

家柄

明治三十三年の建築

今「後鳥羽院天皇行在所址」の碑のある所はその昔源福寺のあつたところである。

現在の村上邸

第三　村上家

村上家は村上天皇の御子孫或は隱岐國造家の子孫とも傳へられてゐる。

代々海士村中里の森ノ里に住み隱岐の長者として古くから知られてゐた。

古い話に同家の主人が都へ上る道すがら大阪の鴻池家へ立寄つたことがある。鴻池家では名高い長者と

早川某ともいふ

村上家一帶の地を因屋城といふ

出雲能義郡に十三ケ村に亙る田地安來町一帶に廣い新田を有してゐたといふ。

て迎への準備おちもなく、殊に大手門から玄關まで荒菰を敷きつめて待受けてゐた。この時村上家の主人は馬に乘つたまゝ荒菰の上を乘入れられたので、鴻池家の主人は聞きしに勝る長者よとほめたゝへたといふ。

永祿年中但馬地方の海賊が隱岐に寇した時之を擊ち退けて毛利家から感狀を得た。

この時の海戰に村上家に代々仕へてゐた石井某は聞えも高い剛の者であつたが、すぐと因屋城に上り手に餘る大青竹を膝頭で二つ割にして、これを十字に襷がけ勇敢にも敵に斬り込んだので海賊共もおそれおののいて引き退いたといふ。

村上家はかやうに隱岐の豪族として榮えてゐた殊に三十七代助九郎秀家の時には島内は勿論出雲國にも廣い地を領し松江藩への納米も四斗入千俵ほどであつた又當時は村上家の海運

の盛んな時で大小五艘の船をもち京都、大阪、下關との間に爲替取引をした程であつた。

三十八代 助九郎秀和の妻てふは秀家の娘で人となり誠實勤儉で德行高く賢母のほまれの高い人であつた。

村上家は代々仁惠の心深く延寶三年全國凶作の時、島前、島後の窮民を救ひ、又この頃不作續きの百姓の爲、諏訪灣に新田工事を起し賃金を日拂として食費を得る途を開き、享保五年同十七年兩度の大凶作の時には、門前に大釜をすゑ、毎日粥を炊いて人々の飢を救ひ、天明三年の不作は翌春早々から飢ゑる苦しむものが多くあつたので先づ穀類を施したが後には金錢を無利息で貸し與へ俗にいふ「はつたい」といふを多く製して與へた。

寛政四年は夏秋共に不作で饑饉は先年よりも甚しかつた、の

脾通丸（七百石積）外四艘	
延寶三年（二三三五）	
享保五年（二三八〇）	
天明三年（二四四三）	
寛政四年（二四五二）	

で又多くの者を救つたといふ。

これ等の救民のため藩主から度々褒狀を授けられた。

明治六年山陵奉還の時四十四代 助九郎秀實は特に奉迎使に隨つて水無瀬宮に參り祖先以來の忠勤を嘉せられ銀杯を賜つた。

明治二十五年十一月御火葬塚守部の置かれるや秀實は初代の守部に任ぜられた。

四十五代 助九郎秀宗は海士村戸長を勤め當主四十六代 助九郎秀清は秀宗の二男で秀實に次いで守部の職を奉じ今日に至つてゐる。

後鳥羽上皇御在島十九ケ年間は北條氏の盛時で人々はその權勢に恐れてゐた時、わが村上助九郎は誠忠無二の人であつたので、とくに里人を率ゐて上皇に仕へ常の御調度を奉り又源福寺の寺領を豐かにするなど忠勤をはげんだ。

されば上皇はをり〳〵村上家に行幸遊され御心安らかに御

助九郎秀實 明治三十三年卒	
助九郎秀宗 明治二十五年卒 明治二十年特に島根縣士族に列せらる。	
勤王事蹟	

駐輦になり時には數ケ月にも及んだとの事である、今村上家に存する「御茶の水」の清泉こそ上皇供御の用に奉つた忠勤を物語るものである。

又上皇の御病重らせられた時、誠を盡して御看護申上げた。上皇おかくれの後同家には高間といふ別室を設けて、御聖靈を奉り「御茶の水」の清泉を朝毎に捧げ拜禮したのであつた。

月の二十二日には上皇の御命日に相當するので、主人は七日間身を清め當日は衣冠を改め正し、先づ御陵に詣でて後、高間に入つて聖靈を拜し初めて衣冠を解くならはしであつた。

此事は六百五十餘年間傳へられたが明治三十三年今の邸宅を造るとき聖靈奉祀はあまりにおそれおほいとて高間を設くることをしなかつた。

しかし上皇の祭祀はそれから後も、同家の私祭として、取行はれ今日に及んでゐる。

又山陵奉仕については自ら守衛の人々を雇ひ扶持米を給し殊に幕末の頃、國内の騒がしかつた時など陣屋敷を建てて、武道をすゝめ專ら山陵警衛の任にあたつたといふ。

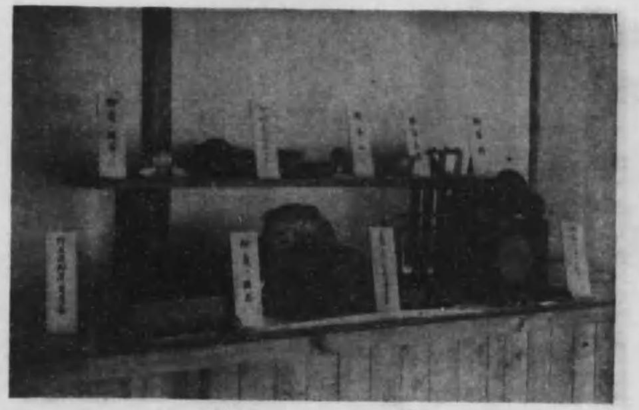
村上家に傳はる寶物は、今寶物館に奉藏し一般に拜觀せしめてゐる、その中の主なるものは

一、後鳥羽天皇御宸筆
　念几厥順緣逆緣或成疎各荅廻
　向併得解脫仍唱伽陀曰(經文の
　一句)

一、御藥茶碗

寶物

寶物



上皇御使用の御茶碗で村上家拜領の品であると傳へらる。

一、御銀鍋
一、御茶入
一、三十三体觀音像（厨子共）
後鳥羽上皇十九ケ年間の歌反古を灰にして作つたものと傳へられてゐる厨子の中に納めてある。
今はくづそて原形を失つてゐる。
一、御椀
御還幸の後皇后宮からおおくり物

一、蓋物　三組（六箇）

一、御茶碗
一、御愛石　猫
一、御愛石　蝦蟇
一、後水尾天皇御念珠
一、銀鏡　二箇
御生母七條院から上皇の御手に朝夕觸るるものと思召されて心して贈られたもの。

第四　御番鍛冶

御番鍛冶

上皇御在島中奉仕した刀工の主なものは

正月　二月　助國（粟田口）
五月　六月　國綱（粟田口）
三月　四月　景國（粟田口）
七月　八月　宗吉（備前）

當時の銘刀で現在島内にあるもの
梶谷家、助宗太刀
燒火神社、助宗
短刀の二口より
他見あたらない

鞴の原形
長さ二尺四寸
巾　六寸
高さ一尺二寸

鞴（梶谷家蔵）

九月
十月　延正（備前）

十一月
十二月　助則（備前）

の六人で月番をきめて奉仕した。

これ等の御番鍛冶は、海士村の東部及び北部に住んでゐた。その中今に傳はるものに北部の梶谷家がある。

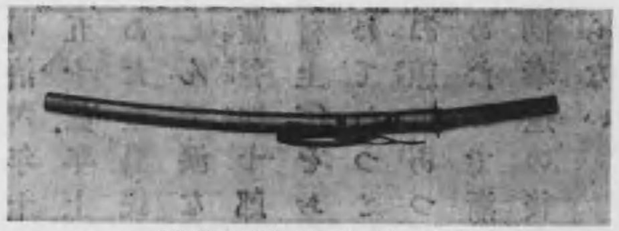
同家はもと鍛冶を業として居たが現在は農家で家號を鍛冶屋敷といひ數百年來の舊家である。

同家の鞴は當時御番鍛冶として同家の祖先が使用してゐたものとして、傳へられ今は殆んど朽ち毀れてゐる。

箱書

太刀
全長三尺五寸
中身二尺七寸

後鳥羽院祭は九月二十七日（御還幸の日八月六日を太陽暦にて）であつたが近年から十月六日と定められた。



助宗銘太刀（梶谷家蔵）

る。明治二十一年、時の島根縣知事籠手田安定、隱岐巡視の時、これをみて箱を造り與へ、鄭重に保存せしめた。

尙同家秘藏の銘刀は同家の祖、備前の新太郎助則の父助宗の作である。

第五　島民の赤誠

上皇御在島中の村上家の奉仕はもとより又島民が上皇を御なぐさめ申上げやうと毎年舊八月六日には向新開（崩御後は日平）で牛づきを催し叡覽に供し奉つた。崩御後も久しい間年中行事として、御神靈をなぐさめ奉つたが、近年はすたれ、十月六日の後鳥羽院祭には、村内小學校兒童の奉納体育

會を催してゐる。

明治六年十一月御神靈奉還のときの事であつた。崩御後六百五十餘年上皇御在世當時と同じ心で山陵をおろがみ奉つてゐた、全島民は諏訪灣頭に到る沿道にひざまづき、お別れを惜しんで涙ながらに奉送したのであるが、中にも村上家の家僕藤谷知十郎は常から謹直者として知られてゐたが、御神靈が村上家をお立ちになつて諏訪神社前にさしかゝると耐へかねて、わつと大聲をあげ、男泣きに泣き、地に臥して足腰も立たぬ態であつた。これを見かねて村上助九郎秀實は一聲たしなめたので漸く鹵簿も御進みになつたといふ。

御奉還の後も島民の山陵として敬ひたふとぶ心持は今も變らない。

大正天皇

四日朝濱田御發航、午后二時別府灣御着、

午后三時三十分棧橋御上陸、

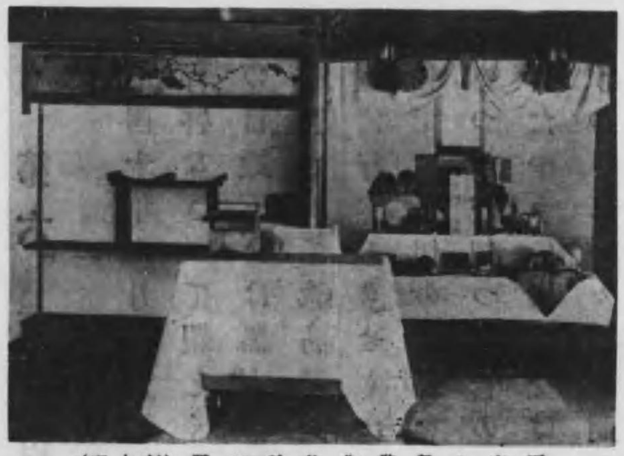
第六　兩度の行啓

明治四十年六月皇太子殿下（大正天皇）には、山陰道行啓の御歸途隱岐に行啓なさつて、親しく勝田の山陵に御參拜なされた。

この日殿下には黑木御所、御下山の後、御召艦鹿島の艦載水雷艇を召されて、諏訪灣圓成寺鼻の假棧橋に御上陸なされ、御火葬塚に行啓あらせられた。御火葬塚は宮內省の所轄であるので、村では一切の裝飾を差しひかへ、只境內を淸掃したばかりであつたが却つて昔の偲ばれて殿下には御感慨深くあらせられたやうに御見受け奉つた。御火葬塚から行在所阯へ玉歩をうつされ種々御下問なされたといふ。

やがて音無の松の跡に松（高サ約二尺）の御手植を遊ばされた。

御休憩の間は現在も當時のまゝに保存してある



兩度の行啓御休憩の間（村上邸）

ついで村上助九郎邸に御立寄遊ばされ凡そ二十分間御休憩なされた。

この間全家では次の寶物を臺覽に供し奉つた。

一、後水尾天皇御宸筆
一、後鳥羽天皇御宸筆
一、後鳥羽天皇御用の御藥鍋御茶碗、猫石、
一、灰佛の觀音
一、古鞴（以上村上氏家寶）
一、後醍醐天皇御宸筆
一、後鳥羽天皇御番鍛冶助宗の短刀（以上燒火神社寶物）

午后六時御歸艦

今上天皇

午后一時五十七分別府灣沖約十町御着艦

一、驛鈴（億岐氏家寶）

この時近侍を經て、當主助九郎に特に祖先が上皇に奉仕の誠忠を、おほめになつた有難い御言葉をたまはつた。

それから同邸前に設けられた玉座につかせられて鬪牛を御覽あらせられたが大さう、御よろこびなさつて鬪牛四組まで御覽になり、その爲豫定の時刻をすごさせられた程であつたといふ。

又大正六年七月七日皇太子殿下（今上天皇）同じく勝田の山陵に行啓遊ばされた。

當時宮內省から行啓の公表があると、村民は喜び合ふこと限りなく、村をこぞつて奉迎の準備に寢食も忘れる程であつた。

この日御召艦香取は供奉艦安藝と別府灣に投錨し殿下には御召艇に御移乘になられて、諏訪棧橋に着かせられて御上陸

午后二時五十七分棧橋御上陸、途中戞島附近で大生洲御覽あり

あらせられた。

昨夜からの雨は今日も霽れず篠つく中を殿下は始終外套の帽覆も召されないで奉拜の島民に擧手の御答禮を遊ばされたので、誰も〳〵おそれおほく思はぬものはなかつた。

御火葬塚では親しく玉串を捧げられて御拜なされ終つて種種御下問なされたといふ。

ついで行在所阯にならせられ勝田の池のほとりに松の御手植をなされた。

午后三時四十八分御召艇にて御出發黑木御所御參拜の後午后五時八分御召艦別府灣御發

それから大正天皇闘牛御臺覽所阯で村民の心づくしの古式田植を御台覽になられ御手づからこれを御撮影遊ばされた。

田植御臺覽の後、村上助九郎邸に御立寄なさつて暫く、御休憩御物、寶物、壽號、驛鈴、屯倉印、鞴など御覽あつて後海路黑木御所へ御參拜あらせられた。

奉迎歌　明治四十年作

諏訪の山も水も雨に一際こまやかな中に御召艦艇の島がくれゆくまで島民はなつかしく奉送申上げた。

皇太子殿下奉迎の歌

春のみ山の高々に
あふぎて待ちし出ましを
をろがみまつるかしこさは
たとへんことばもなかりけり

島根あがたの民草の
さかゆくさまをみそなはす
このいでましのかしこさは

たこへんことばもなかりけり

おもへばかしこきけふの日は
よき日といはひかたりつぎ
出雲石見のおきかけて
いはひまつらんけふの日は

（附錄一）

後鳥羽天皇年代表

一八九〇	二年				
一八九一	三年	土御門上皇崩御（御年三十七）	泰時貞永式目を撰ぶ	貞永元年	遷幸時代四條
一八九二				天福元年	
一八九三				文暦元年	
一八九四				嘉禎元年	
一八九五				二年	
一八九六		遠島御歌合を作らしめらる		三年	
一八九七				暦仁元年	
一八九八				延應元年	
一八九九		後鳥羽上皇崩御（二月二十二日御年六十）			

（附錄一）後鳥羽天皇年代表

紀元	後鳥羽天皇	天皇	將軍	執權	御事蹟	年號	其他重要事項
一八四〇	皇子時代	安徳			後鳥羽天皇御誕生	治承四年	石橋山の戰
一八四一						養和元年	富士川の戰
一八四二						壽永元年	
一八四三		後白河法皇			法王後鳥羽天皇を立つ	二年	
一八四四						(元暦元年)三年	久利加羅谷の戰
一八四五					後鳥羽天皇御即位(神器入京)守護地頭の設置をお許しになる	文治元年	一の谷の戰
一八四六	御在位	後鳥羽院政				二年	壇浦の戰
一八四七						三年	
一八四八						四年	
一八四九						五年	頼朝奥羽を平定す
一八五〇						建久元年	
一八五一					後白河法皇崩御 天皇親政始まる	二年	
一八五二						三年	頼朝征夷大將軍となる
一八五三						四年	曾我兄弟復讐
一八五四	時代	羽	頼朝	元		五年	
一八五五						六年	
一八五六						七年	
一八五七						八年	
一八五八					土御門天皇に御譲位（院政）	九年	
一八五九						正治元年	頼朝薨ず
一八六〇	院政	土御門	頼家			二年	
一八六一					上皇和歌所を置き新古今集を撰せしめらる	建仁元年	
一八六二						二年	頼家に將軍宣下
一八六三				時政		三年	
一八六四					新古今集成る	元久元年	
一八六五						二年	
一八六六						建永元年	
一八六七						承元元年	
一八六八			實朝	義	上皇「おどろが下」の御製を詠ませらる	二年	
一八六九						三年	
一八七〇					順德天皇御即位	四年	
一八七一	時代	順德	朝	時		建暦元年	
一八七二						二年	
一八七三						建保元年	
一八七四						二年	
一八七五						二年	
一八七六						三年	北條時政卒す
一八七七						四年	
一八七八				廣元	源實朝を右大臣に任ず	五年	
一八七九						六年	實朝殺さる（源氏亡ぶ）
一八八〇						承久元年	
一八八一		仲恭				二年	
一八八二	隱岐御	後堀	頼經	義時	承久の亂 後鳥羽上皇御遷幸（御年四十二）	三年	
一八八三						貞應元年	
一八八四						二年	
一八八五						元仁元年	義時卒し泰時執權となる
一八八六						嘉祿元年	
一八八七						二年	頼經に將軍宣下
一八八八						安貞元年	
一八八九				恭	七條院崩御（御年七十二）	二年	
一八九〇	遷幸時代	河				寛喜元年	
一八九一					土御門上皇崩御（御年三十七）	二年	
一八九二						三年	
一八九三		四條	經時			貞永元年	泰時貞永式目を撰ぶ
一八九四						天福元年	
一八九五					遠島御歌合を作らしめらる	文暦元年	
一八九六						嘉禎元年	
一八九七						二年	
一八九八						三年	
一八九九					後鳥羽上皇崩御（二月二十二日御年六十）	暦仁元年	
						延應元年	

隱岐院遠島百首

（村上家藏（村上秀隆筆）によるる）

春　二十首

霞ゆくたかねをいづる朝日かげさすがに春のいろを見るかな。

墨染の袖のこほりに春立てありしにもあらぬ詠（ナガメ）をそする。

解にけりもみぢをとづる山川のたた水くくる春のくれなね。

もも千鳥囀る空はかはらねどわが身の春ぞあらたまり行く。

里人のすそ野の雪をふみ分てたゞわがためと若菜つみてむ。

降雪に野守か庵もあれはててわかなつまんとたれにとはまし。

根芹摘む野澤の水のうすこほりまた打とけぬ春かぜそ吹く。

沖つ浪たつやかすみの絶間にもあまの小舟の春けくそみゆ。

かきりあれは垣根の草も春逢はぬつれなきものは苔ふかきそで。

遠山路幾重もかすめさらはとてをち方ひとのとふもなければ。

春かせに山田の畔を行くしつのみのふきみだる暮そさひしき。

うらやましながき日かげの春にあひていせをの海士も袖やほすらむ。

もえいつる嶺の早蕨雪消えてをり過にける春ぞしらるゝ。
分のぼる袖春雨にうちしほれみねの櫻もいろそものうき。
ながむれは月やはありし月ならぬうき身そもとの春にかはれる。
春雨も花もときそと袖にふるさくらつつきの山の下道。
やとからん片野の原の狩衣日もゆふくれのはなの下かせ。
山姫の霞の袖やしほるらむはなこきたれて春雨そふる。
墨染の袖もあやなく匂ふかなはな吹きみたる春のゆふかせ。
物おもふに過る月日もしらねともはるやくれぬる峯の山吹。

夏　十五首

けふとてや大宮人はかへぬらんむかしかたりの夏ころもかな。
あやめふくかやの軒端に風過てしゝろに落るむらさめのつゆ。
たをやめの袖打ちはらふ村雨にとるや早苗のこゑいそくらむ。
故郷をしのふの軒にかせすきてこけの袂に匂ふたちばな。
今はとてそむき果ててき世の中になにとかたらふ山郭公。

暮かかる山田の早苗雨すきてとりあへすなくほとときすかな。
五月雨に池の汀もまさるらむはすの浮葉をこゆるしら浪。
難波江や海士のたく縄たき佗てけふりにすめる五月雨の袖。
さみたれに宮木も今や下すらん眞木たつ嶺にかゝる村雲。
あはれにもほのかにたたく水雞哉老の寝覺のあかつきの空。
夕立のはれ行く嶺の雲間よりいり日冷しき露の玉篠。
みるからにかた〳〵冷し夏衣日も夕露の大和なてしこ。
ゆふすすみ芦の葉みたれよる浪に螢數そふ海士のいさり火。
下もゆるむかひの森の蚊遣火におもひもさそひ行螢かな。
呉竹の葉すゑ片敷降雨にあつさひまある六月の頃。

秋　二十首

かたしきの苔の衣のうすけれは朝げのかせも袖にたまらず。
よのつねの草葉の露にしほれつゝ物おもふ秋とたれかいひけん。
秋くれはいとゝおもひも眞柴かるこの里人も袖や露けき。

咲かかる山下道もまがふらんたまぬきみたる萩の朝露。
思ひやれ眞柴の扉おし明けてひとりなかむる秋の夕べを。
故郷の別路におふる蔦の葉のかせは吹とも歸るよしもなし。
いかにせん蔦はふ松の時の間もうらみて明けぬ秋風そなき。
なきまさるわか涙にやいろかはる物おもふやとの庭のむら萩。
思ひやれいとと泪もふるさとのあれなる庭の萩のしら露。
徒に都へたつる月日とやなほ秋かせのをとそ身にしむ。
ふるさとの一村すすきいかばかりしけき野原に虫の鳴くこゑ。
野をそむる雁の泪は色もなしものおもふ露の隠岐の里には。
哀なり誰がためとてや初雁のねさめの床に涙そふらむ。
はれよかしうきなをわれにわきもこか葛城山のみねのあさきり。
おか野邊の木間に見ゆる槇の戸に絶〳〵かゝる蔦のあきかせ。
おなしくは桐の落葉も散敷なはらふ人なき秋のまかきに。
ぬれてほす山路の菊もあるものをこけのたもとはかわくまもなき。
たのめこし人の心は秋ふけてよもきかそまにうつら鳴くこゑ。

山本の里のしるへの薄もみちよそにもおしき夕かさし（あらし）かな。
よもすがらなくや淺茅のきりきりすはかなく暮る秋をうらみて。

冬　十五首

ふゆくれは庭の蓬も下かれてかれはの上に月そさえゆく。
みし世にもあらぬ袂をあはれとやをのれしほれてとふしくれかな。
しもかれの尾花ふみ分け行く鹿の聲きくほとそ跡はみえける。
神無月しくれ分行かりかねのつはさふきほす嶺の木からし。
おのつからとひ顔なりし萩の葉もかれ〳〵にふくかせのさむけさ。
よそよりも庭の紅葉のふかきかなしくれにそふる袖の泪に。
そめのこしうらみし山も程もなくまたしもかれのかせおろすなり。
龍田山まがふ木葉のゆかりとてゆふつけ鳥のこからしのかせ。
ちりしける錦はこれも絶ぬへし紅葉ふみ分かへる山人。
冬こもるすゑのさむけさいかならんつま木の道を埋む白雪。
山風のつもるはやがて吹はててふれとたまらぬ峯の白雪。

今朝みれはほとけのあかに摘花もいつれなるらんゆきの埋木。
奥山のふす猪の床やあれぬらんかるもにたへぬ雪のしるしに。
かそふれは年のくれそとしらるれと雪かくほとのいとなみもなし。
さなからや佛のはなとおらせまし樒の枝につもる白雪。

雜　三十首

古の契もむなしすみよしやわかかたそきの神とたのめと。
おきわびぬ消えなばきえね露の命あらばあふ世をまつとなき身を。
とへかしな雲の上よりこし雁も獨友なき浦になくねを。
もしほ燒海士のたくなはうちはへてくるかとたにもいふかたそなき。
かもめなく入江のしほのみつなへにあしの上葉をあらふしら浪。
浪路分け沖の小嶋にいるふねのわれとこかるるたへぬ思ひに。
しほかせに心もいととみたれ芦のほに出てなけとふ人もなし。
里遠くきねか神樂のこゑすみておのれとふくる窓のともし火。
我こそは新島守よおきの海のあらき波かせ心してふけ。

なかき夜をなか〳〵あかす友とてやゆふつけ鳥のこゑそまちかき。
曉の夏をはかなみまとろめはいやはるかなるまつかせそ吹く。
とにかくにつらきはおきの島つ鳥うきをばおのが名にやこたへん。
過にける年月さへそうらめしきいまこそかゝる物おもふ身に。
夕月夜入江にしほやみちぬらむあしのうら葉の田鶴のもろ聲。
都人とはぬほとこそしられけりむかししのふのかやか軒端に。
日にそへてしけりにまさる青つつらくる人もなき槇の板戸に。
何となくむかし語に袖ぬれて獨ぬる夜もつらきかねかな。
人心うしともいはしむかしよりくるまをくたく道にたとへん。
美保の浦を月と友にそ出し身のひとりそ殘る隱岐の外山に。
たくふへきむろの八島も遠ければ思ひのけふりいかにまかへん。
はれやらぬ身の浮雲やいとふまに我世中にかけそふけぬる。
さそひ行は我もつれなん都まてあなぢのかせにまよふ村雲。
よしやたた岩浪高きよし野川よし世中は思ひすてて。
とにかくに人のこゝろも見えはてぬ憂や野守のかたみなるらむ。

故郷の苔の岩橋いかはかりおのれあれても戀渡るかな。
おなし世にまた住江の月やみむ思へはかなし隱岐の島もり。
隱岐のうみに我をやたつぬる友千鳥なくねはおなし賤のさむしろ。
水莖のあとはかなくもなかれゆけはすゑの世までやうきをとゝめん。
こへかしなたかしはさとやむねの煙絶間もなくてくゆる思ひを
なひかすはまたもや神にたむけなんおもへはおなし和歌のうら浪。

昭和十三年二月五日　印刷
昭和十三年二月十五日　發行

非賣品

編輯兼發行人　島根縣海士郡海士村菱浦小學校內　尾關貞次
印刷人　島根縣松江市內中原町五二番地　稲垣正一
印刷所　島根縣松江市內中原町五二番地　松江刑務所
發行所　島根縣海士郡海士村菱浦小學校內　海士村教員會

終